

# 平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ムシガレイ

学名 *Eopsetta grigorjewi*

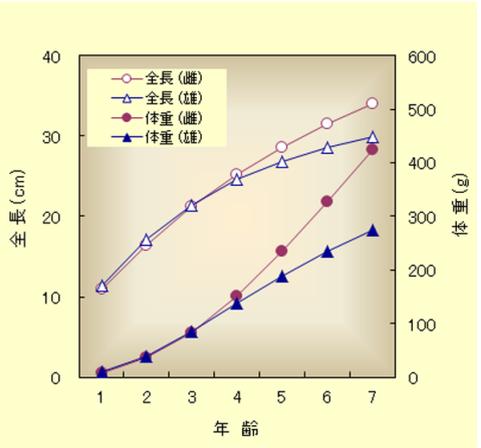
系群名 日本海系群

担当水研 日本海区水産研究所



## 生物学的特性

寿命: 7歳程度  
 成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳  
 産卵期・産卵場: 冬～春季(1～3月)、対馬周辺海域  
 索餌期・索餌場: 夏～秋季、日本海西部  
 食性: 全長約12cmまでは小型甲殻類、12cm以上ではエビ・カニ類やイカ類、全長約18cmから魚類  
 捕食者: 不明

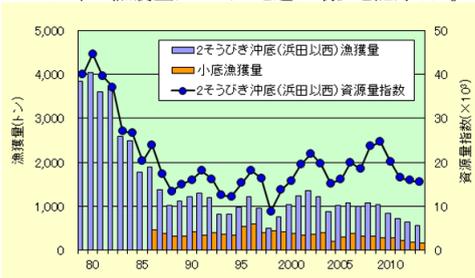


## 漁業の特徴

日本海南海域では、浜田港と下関港を基地とする(浜田以西)2そうびき沖合底びき網(沖底)と小型底びき網(小底)がムシガレイの漁獲量の殆どを占める。沖底の最重要種であり、漁場は対馬南西域から隠岐周辺に及ぶ。底びき網以外では、刺し網、釣・はえ縄でも漁獲される。

## 漁獲の動向

2そうびき沖底(浜田以西)の漁獲量は、1970年代末の約5,000トン进行ピークとし、1980年代の前半に約2,500トン、後半には約1,000トンにまで減少した。その後は低い水準で推移し、2013年は551トンであった。他の漁業種類を加えた2013年の漁獲量は826トンと過去最少を記録した。

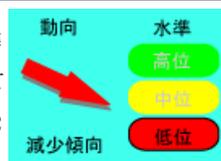


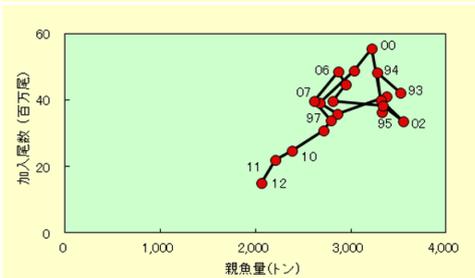
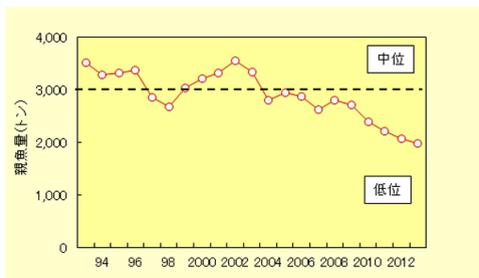
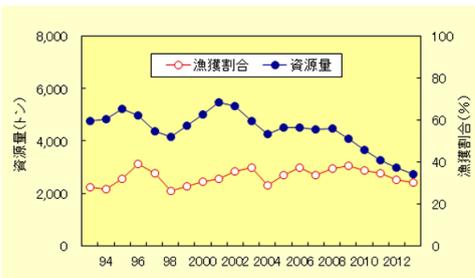
## 資源評価法

1993年以降についてはコホート解析により評価を行った。これに加え1966年以降の沖底の漁獲成績報告書から資源密度指数、資源量指数等を算出した。なお、今年度のコホート解析では、2008年から直近年までの資源量指数を用いてチューニングを行った。

## 資源状態

資源水準の判断には親魚量を用い、再生産関係から求まるBlimit(親魚量=3,000トン)を中位と低位の境界とした。2013年の親魚量(1,980トン)はBlimitを下回っており、資源水準を低位と判断した。資源動向の判断には資源量を用いた。2009～2013年の資源量が減少し続けていることから、資源動向を減少と判断した。漁獲割合は26～39%の間を推移しており、近年では2009年の38%から2013年の30%に低下傾向にある。再生産成功率は、2000年と2006年にともに17(尾/kg)のピークがみられ、2007年から低下傾向にある。2012年は7.3(尾/kg)とこれまでの最低値であった。



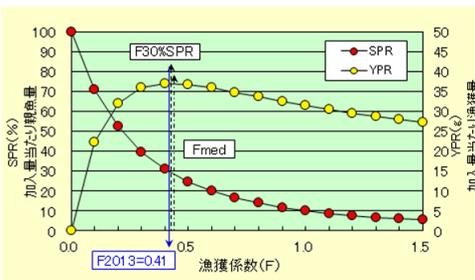


**管理方策**

近年、漁獲係数は低下傾向にあるが、親魚量はBlimitを下回っており、資源量は減少傾向にある。親魚量をBlimit以上に回復させることを管理目標として、ABC算定規則の1-1)-(2)に基づきABCを算定した。2013年以降の再生産成功率が1993年以降の中央値と仮定したときの、Frecによる漁獲量をABClimit、不確実性を考慮して安全率(0.8)をかけた値をABCtargetとした。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	580トン	Frec	0.28	21%
ABCtarget	480トン	0.8Frec	0.23	18%

- ABC算定規則1-1)-(2)を使用
- ABCは1トンの位を四捨五入
- F値は各年齢の単純平均
- 漁獲割合はABC/資源量



**資源評価のまとめ**

- 親魚量はBlimitを下回っており、資源量は減少傾向にある
- 資源水準は低位、動向は減少

**管理方策のまとめ**

- 漁獲圧を現状よりも低く設定し、親魚量をBlimit以上に回復させることを管理目標とする
- 1、2歳魚の漁獲割合が60～80%と高いため、若齢魚の保護等について検討する必要がある

執筆者: 八木佑太・藤原邦浩・上原伸二・井関智明

資源評価は毎年更新されます。